

ひぐらしのなく頃に 望
想渡し編

細波伊織

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は彼女に、恋い焦がれた。

届かないことも承知で。

彼女の瞳に映っていたのは、圭一だった。

それでも俺は、彼女を映し続ける。

いつも通りの帰り道。

いつも通りの日常。

いつまでも続くと思っていた幸せな日々。

しかし、綿流しの日から全てがおかしくなっていた。

まるで、幸せな日々が続くと信じていた俺を嘲笑うかのように、幸せな日々は、俺から遠ざかっていった。

いつの間にか俺の瞳には彼女が映ることは無くなっていった。

目次

プログラグ

1

プロローグ

園崎魅音。

俺は彼女に恋い焦がれた。

届かないことも、知っていた。

それでも、あの日溜まりの様な笑顔に、恋い焦がれた。

彼に敵わないことも分かっていった。

だって彼女は、いつも彼を見ていたから。

彼女の瞳に映っていたのは、俺ではなく彼だった。

それでも俺は、あの笑顔を守りたかった。

例え、この想いが届かなくても……俺は彼女を守りたい。

一見ガサツで男勝りだけど本当は誰よりも女の子らしくて優しい……魅音を守りたかった。

そう、思っていたのに。

いつからか、仲間であり最高の友人であった園崎魅音は園崎家の時期当主、園崎魅音にしか映らなくなった。

俺の瞳にはもう、彼女の本当の姿は映っていないなかったのだ。

心配して俺に声を掛けてくれた圭一。

俺を心配してくれたレナ。

頭を撫でて元気付けてくれた梨花ちゃん。

いつも周りを明るくしてくれる沙都子。

そして、俺を元気付けて、部活に入れてくれて……俺達を引っ張っていつてくれた魅音。

だから、皆の事を忘れるために……俺は、この手を降り下ろし続けよう。

どんなに腕が痛くて、疲れていても、止めたら……俺の決意は揺らいでしまうから。

だから、仲間の元へ俺の思い出も置いていこう。

魅音が一瞬、悲し気な目で俺を見た気がした。

既に虫の息で、腕を動かす事すらままならないはずの魅音が、壁の近くまで這いずり、立ち上がる。

俺も、ゆっくり、彼女に近づく。

彼女が立ち上がるのとほぼ同時に、俺が彼女の前に立つ。

俺が彼女の顔目掛けて腕を降り下ろしたとき、彼女の唇が動いた。

そして、俺に微笑んだ。

しかし、もう止めることは出来ない。

「う……………あ……………うわあああああ!!」

何度も、腕を振り上げて振り下ろす。

——もう、魅音も、圭一も、レナも、沙都子も、梨花ちゃんもいない。

二度と俺の事を仲間だと言ってはくれない……。

魅音達を見ていたら不意に、吐き気が込み上げてきた。

もう、皆気にすることなんて出来ないのだから、その場で嘔吐しても問題は無かった。

なのに俺は、目の前の光景を目にしても信じられなかった……。

信じたくない。

でも現実だ、この惨劇を引き起こしたのは俺自身だ。

これはきつと悪い夢なんだ。

違う、目の前の仲間達を見てみる、間違えなく現実だ。

内なる二人の俺が囁く。

「魅音……………魅音……………!」

魅音の体を揺する。

全く動かない。

「レナ……………レナ……………!」

同じようにレナの体を揺する。

全く動かない。

「圭一……圭一……！」

同じように圭一の体を揺する。

やはり動かない。

「沙都子……沙都子……！」

同じように沙都子の体を揺する。

全く動かない！

「梨花ちゃん……梨花ちゃん……！」

同じように梨花ちゃんの体を揺する。

動かない……皆、動かない。動かない。動かない。

動かない。

この単語が、俺の頭の中で跳ね回る。

それでも、受け入れられなくて、魅音の体を思いきり揺する。

「魅音！ 誰か！ 返事をしてくれよ！ おい……頼むから……返事をしてくれよ

……！」

俺の声は、虚空に溶けて、誰にも届くことは無かった。

魅音。

もう、この想いが実ること無いけれど。

それでも言おう。

俺は、園崎魅音が、好きだった……今でも、大好きだ。